

2006	UT	m1	Dia	DC	Tail	p.a.	Trans.	Seeing	Instru.	Observer
	27.50	9.8	3.5	3	-	-	3/5	5/10	25 × 10cmB	佐藤裕久
	27.52	9.6	7	-	-	-	4/5	4/5	60 × 20cmR	関 勉
	28.53	9.5	10	2	-	-	-	-	60 × 20cmR	"
	30.52	8.7	9	2	-	-	4/5	4/5	68 × 46cmL	村上茂樹

C/2006 M4 (SWAN) (写真 c)

IAUC 8729 によれば、Robert D. Matson (Newport Coast、カリフォルニア) と Michael Mattiazzo (Wallaroo、南オーストラリア)はそれぞれ独立して SWAN 画像から移動する天体を見つけ、南半球の観測者に近くに彗星らしいものがあるか確認を依頼した。

Mattiazzo の要請に対し Terry Lovejoy (Thornlands, クイーンズランド州、オーストラリア)は、6月30日に得た Canon 350D camera + f.l.100-mm f/3.5 lens の CCD 画像から彗星と思われる 0.5 の丸いコマのイメージを見つけた。

その後の観測からこの彗星は、近日点通過日 = 2006年9月28日頃、近日点距離 = 0.78 AU、軌道傾斜角 111° であることがわかった。

なお、この彗星は、8月12日から30日まで SOHO/LASCO C3 の画像にも入ってくるが、果たして見られるだろうか。



(写真 a) 177P/Barnard 2 2006,07,28
21h 54m ~ 22h 13m (JST) exp. 19m 60cm L+TMY 400 Film
芸西天文台 関 勉



(写真 b) 177P/Barnard 2 2006,07,30
21h 45.0m ~ 55.0m (JST) exp. 40s x8 Sky90 + CCD
三重県伊賀市上野 田中利彦氏



(写真 c) C/2006 M4 (SWAN) 2006,07,22
2006 July 22.27(UT) exp. 45s x16 41cm L + EOS 10D
© John Drummond, Gisborne, New Zealand



(写真 d) 73P-C/Schwassmann-Wachmann 3 2006,07,29
3h 35m ~ 45m (JST) exp. 10m 60cm L + TMY 400 Film
芸西天文台 関 勉

73P/Schwassmann-Wachmann 3 (写真 d)

7月中旬頃から再び観測され、高知市の下元氏の CCD 観測では、7月27.8日 UT には、C核が CCD 全光度 13.0 等、B核は同じく 15.8 等であった。また、oaa-comet ML で次のようにコメントをしている。「73P の C 核はもう暗くなっただろうと思っていたら、まだ立派な尾があって彗星らしい姿です。73P の B 核は 15.8 等と暗くなりましたが、画面からはみ出すような長い尾を引いています。B 核は軌道計算が難しくなってきました。...分裂による噴射効果が出ているのでしょうか。...」

その他発見・検出された彗星は次のとおり。

178P/Hug-Bell = P/2006 01

7月16.40日 UT、Dan Tibbets と Gary Hug (Farpoint 天文台、0.7-m reflector + CCD) は、P/1999 X1 を 18.6-18.7 等で検出した。予報(MPC 48383, 2006 Comet Handbook)に対し $T = -0.12$ day であった。(IAUC 8730, 2006 July 17)

その他比較的明るい彗星は、41P/Tuttle-Giacobini-Kresak、C/2004 B1 (LINEAR)、71P/Clark、4P/Faye などであった。

2. 「ハツ杉天体観測所だより」(松本)

宇宙の科学的な法則に惹かれ、その謎を解こうとする人、芸術的な美しさに感動する人、時空の大きさから哲学を感じずると同じ星でも、科学的、芸術的、哲学的にと、いろいろな捕らえ方があるようである。

体調を崩して、搜索も休止状態になっているが、透明度の良い晴れ間が続くと身中の虫が騒ぎだし、搜索していた視野へと思いは巡る。

通いなれた観測所へと出かけ、いつもと変わりなくセッティングし、使い慣れた愛器を前に、アイピースに目を当てて、おもむろに視野内に神経を集中させる。

搜索を初めてしばらくは、眼のまえに展開する星の姿がはっきりしない。視野いっぱい広がる星ぼしは、時間の経過と共に、だんだんと気持ちよく流れだす。美しい星は、視野の隅から現われて、そして静かに視野の外へと消えていく、一定のリズム。あたかも名曲を聴いているようである。

若いころから星は、何となくさまざまな音を奏でているように思えた。ワルツ、メヌエットなど、とりわけペルセウス座を搜索するのが一番好きだ。この辺りを流していると、8等から9等ぐらいの星が、淡々とした調子で点在しているので、一段と気持ちも静まるからである。調子はアンダンテだろうか。またオリオン座、大犬座付近は、早く快活なスケルツォ、といった具合。スタッカートありレガートありで、視野の流れに身を任せていると、ときどきため息が出る。

ときには、美しい旋律が続くとアイピースから目が離せず、宇宙に溶け込んだ感じになってしまって、何処にいるか分からなくなることがよくある。ハッとわれに返って辺りを見回し確認する。あらためて、ひっそりと静まった誰もいない早暁の観測所と分かって安堵し、思わず笑いが出てしまう。

このところ久しく、それらの名曲を耳にしていけないが、今宵も夜空のオーケストラは、首を長くして来場を待っているのだろうか。